

平成21年 7月18日(土)~10月18日(日)

平成21年度第2回企画展



金原遺跡発掘出土品展Ⅲ

期間中の休館日

7月21・27日

8月3・10・17・24・31日

9月7・14・24・25・28~30日

10月1・2・5・13日



宮代町郷土資料館

〒345-0817

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原 289

TEL 0480-34-8882 FAX 0480-32-5601

Email museum@town.miyashiro.saitama.jp

開催にあたって

金原遺跡は平成16年度彩の国まごころ国体アーチェリー会場のはらっパーク宮代建設に伴い、平成8年10月から平成11年4月にかけて約2年半に渡り発掘調査が行われました。この間の平成9年6月12日から8月24日にかけては企画展「金原遺跡発掘出土品展 金原遺跡へのいざない」が、平成10年8月13日から10月25日には企画展「金原遺跡発掘出土品展Ⅱ 遺跡からのメッセージ」が行われ、住民の皆様方に発掘調査の状況を公開してきましたが、遺物の整理作業が終了し新たなことが判明したため、集大成として第3回目（発掘調査終了後では初めて）の企画展を開催することとなりました。縄文時代後期初頭（約3,700～3,900年前）の大集落が発見された貴重な事例です。是非ご観覧ください。



航空写真（南側から）金原遺跡の西側の調査区航空写真

平成21年7月
宮代町郷土資料館



上 第226号土坑土器出土状況
下 第226号土坑出土土器

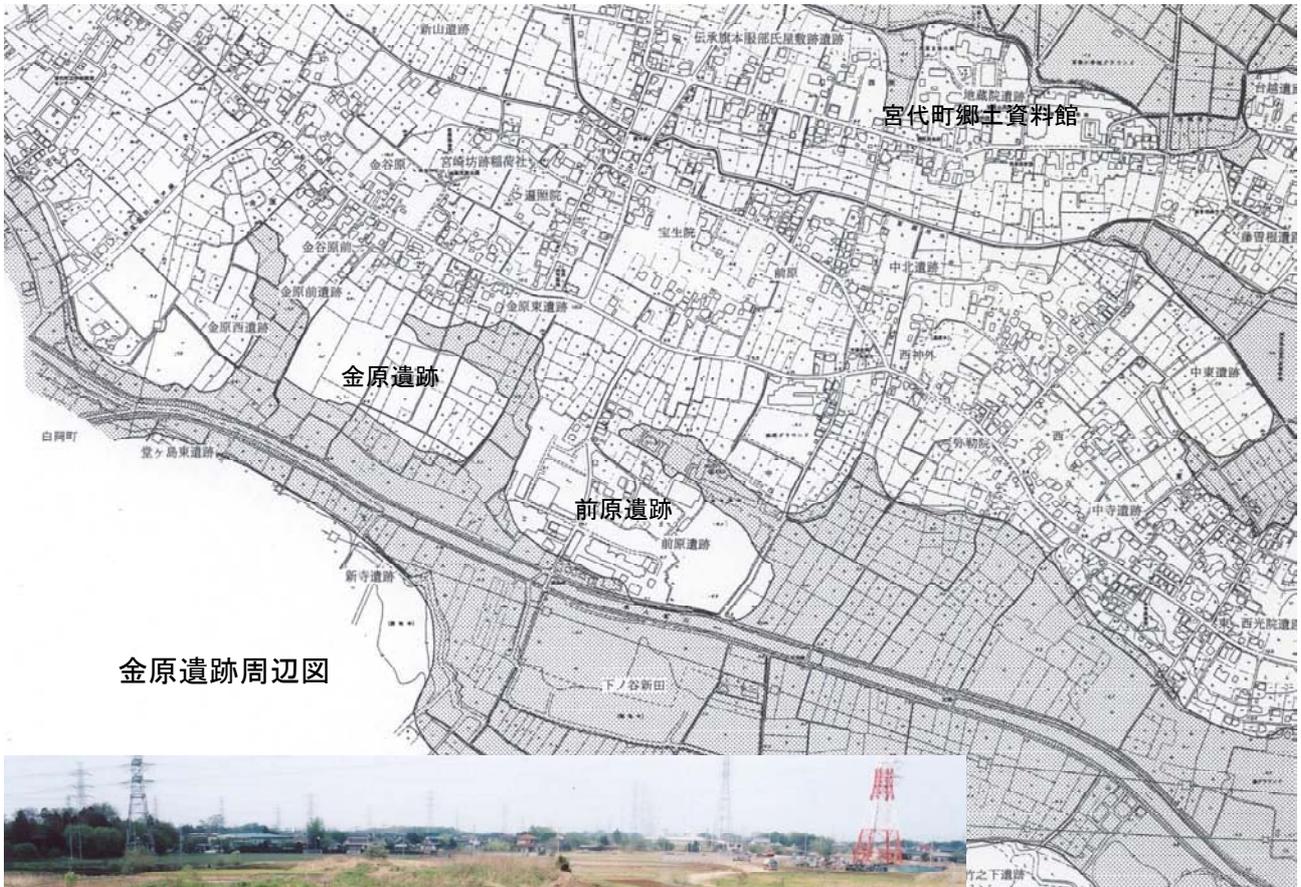


凡例

- 1 本書は平成21年7月18日から10月18日にかけて開催される企画展「金原遺跡発掘出土品展Ⅲ」の展示図録です。
- 2 本書並びに展示した写真は当館学芸員河井伸一が撮影いたしました。
- 3 本展の企画及び図録の編集は河井が担当しました。なお、展示については資料館職員等が協力して行いました。

金原遺跡の位置と周辺環境

金原遺跡は、宮代町の南部に位置し、隼人堀川を挟んで春日部市や白岡町と接しています。地形的には、大宮台地慈恩寺支台にあたり、東地区から金原地区へ続く台地から島状に南に張り出した場所に立地します。縄文時代前期の約 6,000 ～ 5,000 年前には東京湾が奥深くまで到達し、宮代町付近も海に面していました。その後 4,500 年前になると、海は東京方面に退きますが、約 3,700 年前頃には、再び宮代町付近は海沿いのムラとなったようです。西光院遺跡ではその頃の貝塚が見つかっています。金原遺跡では約 4,000 年前頃から住居跡が多く確認されるようになり、約 3,500 年前頃まで集落が営まれていました。



金原遺跡周辺図



金原遺跡全景
(東側から)

旧石器時代のムラ

金原遺跡では旧石器時代後期の約 20,000 年前から人々が暮らしていたことが分かっています。この当時は氷河期で中国大陸と日本列島が陸地で繋がっていた頃と考えられています。金原遺跡周辺では人々の生活の場所であった台地と谷（現在の水田）との比高差は 10 メートル以上もあったと推定されます。金原遺跡ではこの台地の縁辺部で石器を製作した場所等である石器集中（ブロック）が 11 基、火を焚き煮炊きを行った場所等である礫群が 9 基発掘されています。石器集中から出土した黒曜石を分析した結果、長野県の諏訪、蓼科、和田峠のものが最も多く、次に栃木県の高原山のものが多い状況です。遠隔地では秋田県の男鹿半島や伊豆神津島の黒曜石も僅かに出土しています。



第 1 号石器集中（ブロック）



ナイフ形石器

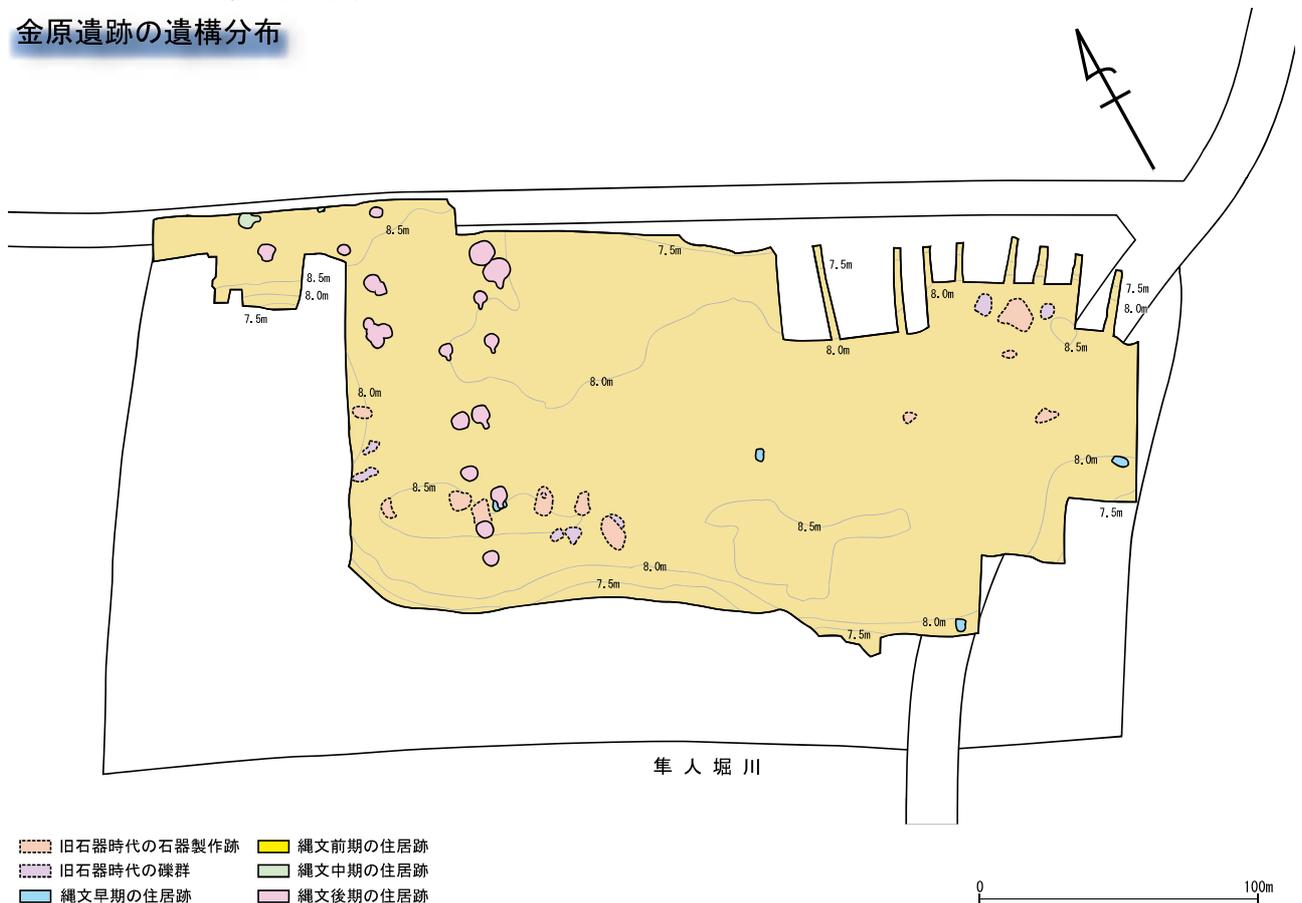


スクレイパー



尖頭器（ポイント）

金原遺跡の遺構分布



縄文時代のムラ

金原遺跡では約 7,500 ～ 7,000 年前頃に小規模な集落が島状の台地の東側で営まれていましたが、本格的に縄文ムラが形成されたのは、今から 4,000 年前頃（縄文時代中期後半加曾利 E 式期末葉）からです。島状の台地の付け根部分でその頃の住居跡や土器が多数見つかっています。その後、約 3,900 ～ 3,700 年前（縄文時代後期初頭称名寺式期後半）には、島状の台地の西側で住居跡が 18 軒、方形柱穴列が 1 棟、貯蔵穴やゴミ捨て穴等の土坑が多数検出されていることから、この付近で最も大きいムラが営まれていたようです。住居跡の配置は 2 列の狭い V 字状を呈します。住居跡列の西側には円形の土坑群が、東側には方形柱穴列が建てられ、この方形柱穴列付近でムラの「お祭り」等が行われたと推定されます。約 3,700 ～ 3,500 年前（縄文時代後期前葉堀之内式期）になると、島状の付け根部分の斜面側で住居跡が僅かに確認されています。この頃は、金原遺跡周辺の藤曾根遺跡や山崎山遺跡等でもムラが確認されていることから、金原ムラの住民は場所を移動し、小規模なムラを町内各地で造ったと推定されます。



金原遺跡の縄文ムラ
イメージ図

第 1 号住居跡

第 1 号住居跡は円形の住居跡です。炉跡は中央やや南西側で確認されました。炉床面は、硬くしまっており、覆土から多量の焼土が出土しました。柱穴は 14 本を数え、概ねその掘り込みは 50 ～ 70cm 程度のものがほとんどです。数本の主な柱穴で建物を支える形態ではなく、壁付近に等間隔で多数の柱穴が支える壁柱穴に近い形態であったと推定されます。金原遺跡の称名寺式期（約 3,900 ～ 3,700 年前）の住居跡では、最も新しい住居跡の一つと推定されます。



第 1 号住居跡

第2・6号住居跡

第2号住居跡は柄鏡型の住居跡です。柄部は南側に張り出しているため、入り口は南側にあったと推定されます。主体部と柄部との接点には細長い土坑が対になって検出されました。その間では埋設土器が出土しました。この埋設土器は口縁部と底部を欠きます。主な柱穴は、入り口部2箇所、東西3箇所、奥壁1箇所の9本で建てられていたと推定されます。奥壁の柱穴からは覆土上層よりやや大き目の土器片と共に磨石と推定される球状の石が検出されました。祭祀に伴う可能性もあると推定されます。



第2・6号住居跡

ここからは炭化材も出土しました。樹種はエゴノキ属で、放射性炭素年代測定法によると3,710～3,140年前との結果が出ています。なお、北側では把手付きの大型の蓋が出土しています。本住居跡は縄文時代後期初頭称名寺式期の住居跡と推定されますが、主柱穴タイプですので壁柱穴タイプの住居跡よりは古い可能性があります。

第6号住居跡は長方形の住居跡です。第2号住居跡と重複しますが、第6号住居跡の方が古いです。本住居跡からは、柱穴は比較的細長いものが多いといえます。出土遺物は、覆土中から早期後半条痕文土器が出土しました。石製品としては、玦状耳飾、石鏃などが出土しています。本住居跡は縄文時代早期条痕文期（約7,000年前）の住居跡と推定されます。

第3号住居跡

第3号住居跡は柄鏡型の住居跡です。覆土に焼土や炭化材が多量に含まれていたことから焼失住居と推定されます。出土した炭化材は建築部材と推定され、分析した結果、全てが栗であることが判明しました。これらのことから本遺跡周囲には、栗林が生育していた可能性が高いといえます。また、放射性炭素年代測定法によると4,090～3,630年前との結果が出ています。炉跡は、中央で確認されました。この炉跡は、深さ140cmもある柱穴と重複していたことから、住居廃棄の祭祀に伴う可能性があります。炉跡の南側で埋設土器が出土しました。この埋設土器は胴下半から底部を欠いていて、中に柱を通して使用されたと推定されます。主な柱穴は、入り口部2箇所、東西3箇所、奥壁1箇所の9本で建てられていました。中央にある炉跡周辺では、炉跡を囲みこむ様に北側を除き、コの字状に連続する柱穴列が検出されています。本住居跡は縄文時代後期初頭称名寺式期の住居跡と推定されますが、主柱穴タイプですので壁柱穴タイプの住居跡よりは古い可能性があります。



第3号住居跡



第3号住居跡埋設土器出土状況



復元された第3号住居跡埋設土器

第4号住居跡

第4号住居跡は柄鏡型住居跡です。柄部が南側にあるため、ここが出入り口と推定されます。主体部と柄部との接点で2本の細長い穴が確認されました。主な柱穴は入り口部2箇所、西側3箇所、東側2箇所、奥壁1箇所の計8本の柱穴で建てられていたと推定されます。本住居跡は縄文時代後期初頭称名寺式期最末（約3,700～3,900年前）の住居跡と推定されますが、支柱穴タイプですので壁柱穴タイプの住居跡よりは古い可能性があります。



第4号住居跡

第5号住居跡

第5号住居跡は楕円形の住居跡です。炉跡は確認されませんでした。中央部に攪乱があったためと推定されます。柱穴は、12本を数えました。出土遺物はありませんが、周囲の遺物出土状況から、本住居跡は、縄文時代後期称名寺式期（約3,900～3,700年前）の住居跡と推定されます。



第5号住居跡

第7号住居跡

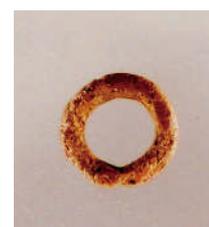
第7号住居跡は柄鏡型の住居跡です。柄部は、ほぼ南側に張り出していることから、ここが出入り口と推定されます。主な柱穴は入り口部に2箇所、東西3箇所、奥壁1箇所の9本で建てられていました。第3号住居跡では、他の柱穴に比し、支柱穴の平面形態は大型でしたが、本住居跡では、他の柱穴と平面形態はほぼ同様で、深さがやや深いといえます。柱穴の重なり具合から2度にわたり改築された可能性があります。出土遺物では、小型の指輪形土製品やミニチュア土器、打製石斧、磨石などが出土しています。本住居跡は縄文時代後期初頭称名寺式期（約3,900～3,700年前）の住居跡と推定されますが、支柱穴タイプですので壁柱穴タイプの住居跡よりは古い可能性があります。



第7号住居跡



ミニチュア土器



リング状土製品

第 8 号住居跡

第 8 号住居跡は長方形の本住居跡です。炉跡や柱穴の検出がなかったため、住居跡であるかについては、疑問も残りますが、覆土が明瞭に黒かったことから堅穴状遺構であることは、間違いないと推定されます。本住居跡は、縄文時代早期中葉沈線文期（約 7,500 年前）の住居跡もしくは、堅穴状遺構と推定されます。

第 8 号住居跡



第 9 号住居跡

第 9 号住居跡は長方形の住居跡です。炉跡は、確認されませんでした。柱穴は、比較的小型のものが多く、直径 30cm 程度で、深さは、概ね 20 cm ~ 40 cm です。本住居跡は、縄文時代早期条痕文期（約 7,000 年前）の住居跡と推定されます。

第 9 号住居跡



第 10 号住居跡

第 10 号住居跡は長方形の住居跡です。台地縁辺の肩部に位置する場所で確認されたため、床面は斜めです。炉跡はありませんが、柱穴状のピットが 3 本検出されました。本住居跡は、立地条件等から住居跡であるかについて疑問が残りますが、覆土が明瞭に黒かったことから、少なくとも堅穴状遺構であることは、間違いないと推定されます。本住居跡は、縄文時代早期中葉沈線文期（約 7,500 年前）の住居跡もしくは、堅穴状遺構と推定されます。

第 10 号住居跡



第 11 号住居跡

第 11 号住居跡は円形の住居跡で、第 17 号住居跡、第 12 号住居跡より古いことが確認されています。また、出土遺物から第 13 号住居跡より古い可能性もあります。炉跡は、中央部で確認されました。本住居跡は縄文時代後期初頭称名寺式期後半（約 3,900 ~ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。

なお、これら住居跡群の新旧関係は、第 11 号住居跡が最も古く、第 17 号住居跡がそれに続き、第 12 号住居跡と第 13 号住居跡が最も新しいと推定されます。しかし、いずれの住居跡も縄文時代後期初頭称名寺式期の後半から最終末のものであるので、大きな時間差はないと推定されます。



第 11 号住居跡

第 12 号住居跡

第 12 号住居跡は楕円形の住居跡で、第 11 号住居跡及び第 17 号住居跡と重複しますが、本住居跡が最も新しいと分かっています。床面は、本住居跡より第 17 号住居跡の掘り込みが深いため、褐色土層で床面の構築を行い、平坦化しています。炉跡は、中央部やや北側で確認されました。覆土からは多量の焼土が出土しました。柱穴の配置は壁柱穴に近い形態といえます。なお、柱穴の底面からオニグルミが出土しました。放射性炭素年代測定法によると 3,920 ~ 3,840 年前の結果が出ています。本住居跡は壁柱穴であるため、縄文時代後期初頭称名寺式期最終末の住居跡と推定されます。



第 12 号住居跡

第 13 号住居跡

第 13 号住居跡は楕円形の住居跡で、第 11 号住居跡と重複しますが、出土遺物から本住居跡の方が新しい可能性が高いといえます。明瞭な炉跡は検出されませんでした。中央付近で焼土の散布が確認できたため、これが炉跡であると推定されます。本住居跡は、縄文時代後期初頭称名寺式期後半(約 3,900 ~ 3,700 年前)の住居跡と推定されます。



第 13 号住居跡

第 14 号住居跡

第 14 号住居跡は楕円形の住居跡で、第 11 号住居跡、第 12 号住居跡、第 17 号住居跡と重複しますが新旧関係は不明です。炉跡は、中央部やや東側で確認されました。第 218 号土坑と重複していた影響により被熱による硬化面は確認できませんでした。炉跡からはやや大型の口縁部を伴う土器片が逆位で出土しました。本住居跡は、縄文時代後期初頭称名寺式期後半(約 3,900 ~ 3,700 年前)の住居跡と推定されます。



第 11 ~ 14・17 号住居跡

第 17 号住居跡

第 17 号住居跡は楕円形の住居跡で、第 11 号住居跡及び第 12 号住居跡と重複しますが、第 11 号住居跡より新しく、第 12 号住居跡より古いことが分かっています。覆土は第 12 号住居跡の張り床により非常に硬い状況でした。炉跡は確認できませんでした。本住居跡の覆土で第 12 号住居跡の床面構築土からは形が変わった土器が出土しています。本住居跡は、縄文時代後期初頭称名寺式期後半(約 3,900 ~ 3,700 年前)の住居跡と推定されます。



第 17 号住居跡

第 15 号住居跡

第 15 号住居跡は柄鏡型の住居跡です。柄部は、ほぼ南側に張り出していることから、ここが出入り口と推定されます。主な柱穴は入り口部に 2 箇所、東西 2 箇所、奥壁 1 箇所の 7 本で建てられていました。深さは概ね 30 ～ 45cm でした。本住居跡は、縄文時代後期初頭称名寺式期後半（約 3,900 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。



第 15 号住居跡

第 16 号住居跡

第 16 号住居跡は柄鏡型の住居跡です。柄部はほぼ南側に張り出していることから、ここが出入り口と推定されます。柱穴の配置は中央掘り込み部周囲（内側）に並ぶ柱穴と縁部（外側）に配置される柱穴との二重の柱穴列があったものと推定されます。内側の柱穴列は規則性はないようですが、外側の柱穴列は壁柱穴のようで、やや規則性があるようでした。炉跡は中央で確認されました。炉跡の周囲は張床が構築されていました。それぞれの柱穴で重複が見られるため、数度の改築が行われた可能性があります。本住居跡は、縄文時代後期初頭称名寺式期後半（約 3,900 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。



第 16 号住居跡

第 18 号住居跡

第 18 号住居跡は円形の住居跡です。本住居跡は、戦後の畑地の陸田化により削平されていました。中央部で炉跡、周囲から 8 本の柱穴を検出しました。本住居跡は、縄文時代後期初頭称名寺式期（約 3,900 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。



第 18 号住居跡

第 19 号住居跡

第 19 号住居跡は楕円形の住居跡です。覆土に焼土や炭化材が少量混入していました。炉跡は中央で確認されました。柱穴は 13 本が確認されました。本住居跡は、縄文時代後期堀之内式期（約 3,500 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。



第 19 号住居跡

第 20 号住居跡

第 20 号住居跡は楕円形の住居跡です。炉跡は検出されませんでした。覆土から焼土や炭化材が多量に出土しました。柱穴は 14 本が確認されましたが、比較的浅めです。横転した状態で、堀之内 2 式の朝顔形深鉢が出土しています。本住居跡は、出土遺物等から縄文時代後期堀之内式期（約 3,500 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。

復元された土器



第 20 号住居跡

第 20 号住居跡出土土器

第 21 号住居跡

第 21 号住居跡は円形のやや大型の住居跡ですが、南側へ僅かに張り出しており、柄鏡型住居跡の可能性もあります。炉跡は、主体部中央で確認されました。炉床は著しく硬化していました。柱穴は深さ約 50 ～ 80cm のやや深い穴が等間隔に並ぶ壁柱穴の状態でした。第 3 号住居跡は主柱穴タイプでしたので、それより後出的といえます。出土遺物の中には有孔土製品、土器の蓋などもありました。本住居跡は、縄文時代後期称名寺式期終末（約 3,900 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。



第 21 号住居跡

第 21 号住居跡出土有孔球状土製品



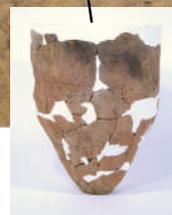
第 22 号住居跡

第 22 号住居跡は柄鏡型の住居跡です。柄鏡はほぼ南側に張り出していることから、ここが出入り口と推定されます。炉跡は中央で検出されましたが、中央部は更に掘り窪められ、土坑状を呈していました。住居跡内の西側と東側で埋設土器が検出されました。2つの埋設土器は炉跡からは同距離で、主軸に直交します。柱穴は、入り口部 2 箇所、東西の 4 箇所、奥壁 1 箇所の計 11 本で建てられており、壁柱穴に近い形態といえます。柱穴の配置からは、第 3 号住居跡より新しく、壁柱穴である第 1 号住居跡や第 21 号住居跡よりは古いようです。本住居跡は、縄文時代後期称名寺式期後半（約 3,900 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。



第 22 号住居跡

第 22 号住居跡出土埋設土器 1・2



第 23 号住居跡

第 23 号住居跡は、楕円形の主体部に L 字状の柱穴列を持ち、入り口部が張り出す住居跡です。覆土からは焼土や炭化材が多数出土したことから焼失住居と推定されます。中央部で 2 箇所の炉跡が確認されたことから、張り出し部を持つ住居跡から、円形の住居跡に小さく建て直されたことが分かります。出土した炭化材を分析した結果、炉跡や柱穴から出土したものは栗でした。更に柱穴から出土した炭化材を放射性炭素年代測定法で分析すると 4,170 ～ 3,730 年前との結果が出ました。しかし、本住居跡から出土した土器は、他の住居跡で出土している後期初頭称名寺式土器（約 3,900 ～ 3,700 年前）よりも新しいとされる後期前葉堀之内式土器（約 3,500 ～ 3,700 年前）ということで、若干年代に誤差が生じています。柱穴は、等間隔で配列される壁柱穴で、張り出し部には L 字上の柱穴列が確認できました。本住居跡は、縄文時代後期堀之内式期（約 3,700 ～ 3,500 年前）の住居跡と推定される。



第 23 号住居跡



復元された第 23 号住居跡出土土器



第 23 号住居跡出土土器

第 24 号住居跡

第 24 号住居跡は、柄鏡形の住居跡の柄部分であると推定されます。柄部の断面は、柱穴を含む掘り込み遺構の周囲をテラスが巡る形態となっています。明瞭な柱穴は 1 本だけでした。本住居跡は、縄文時代中期終末加曾利 E IV 式期（約 4,200 ～ 4,000 年前）の住居跡と推定されます。



第 24 号住居跡

第 25 号住居跡

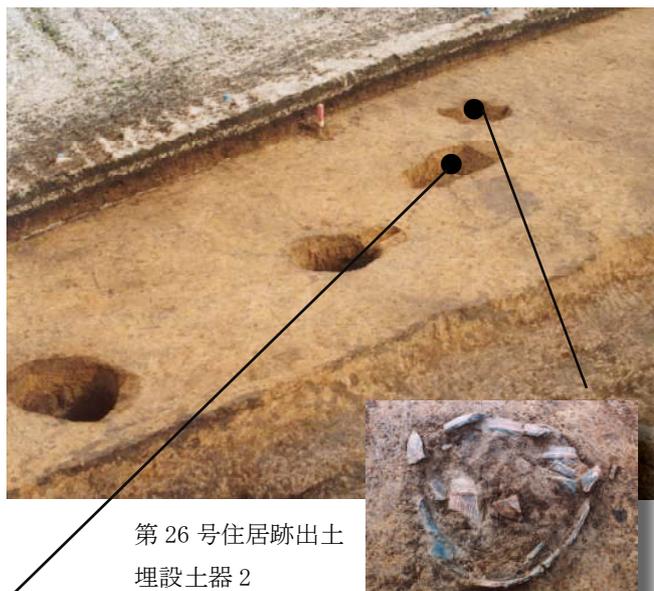
第 25 号住居跡は円形の住居跡です。炉跡は大型のもので中央部で検出されました。覆土からは多量の焼土や炭化材が出土しました。柱穴は 8 本を数え、概ねその掘り込みは 30 ～ 50cm 程度のものが多いといえます。出土遺物の中には、注口土器（急須形の土器）の蓋や土器片錘などが出土しています。本住居跡は縄文時代後期称名寺式期終末（約 3,900 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。

第 25 号住居跡



第 26 号住居跡

第 26 号住居跡は柄鏡型の住居跡です。炉跡は中央で確認されました。埋設土器は 2 箇所検出されました。埋設土器 1 は、住居主体部と柄部との接点に配置されたもので石棒と共に出土しました。検出状況は土器内に別の土器の底部が皿状に置かれていました。あたかも、皿状の土器の上に重要なものが置かれているかのような様子でした。埋設土器 2 は住居跡柄部の先端で検出されました。この埋設土器は、埋設土器 1 とは異なり、底部に穴が開けられていました。2 つの埋設土器とも祭祀的な意味合いが強いものと考えられます。本住居跡は縄文時代中期後半加曾利 E 式期後半（約 4,200 ～ 4,000 年前）の住居跡と推定されます。



第 26 号住居跡出土
埋設土器 2



第 26 号住居跡出土埋設土器 1

第 27 号住居跡

第 27 号住居跡は円形の住居跡です。炉跡は確認されました。柱穴は 9 本を数え、概ねその掘り込みは 20 ～ 40cm 程度のものが多いです。出土遺物は土器片錘が出土しています。本住居跡は、縄文時代後期称名寺式期（約 3,900 ～ 3,700 年前）の住居跡と推定されます。

第 27 号住居跡



第1号方形柱穴列

方形柱穴列とは屋根が付く掘立柱建物かトーテムポール状の構築物かは不明ですが、いずれにしてもムラの中心的な建築物であったと推定されます。この方形柱穴列は細い柱穴の柱穴群と大きい穴の土坑群とが重複していると推定されます。土坑群の方が柱穴群より新しいことが分かっています。この柱穴列付近からは多量の土器が出土しました。また、柱穴列の中央部付近では焼土が確認されています。

これらのことから、この方形柱穴列はムラの中心的な場所でお祭りなどを行う場所であったと推定されます。

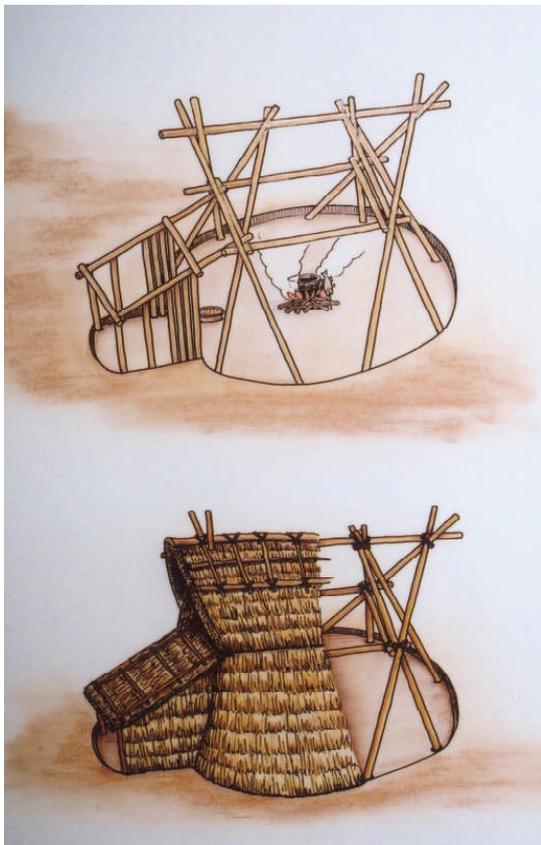


第1号方形柱穴列

金原遺跡で発掘された竪穴住居跡

金原遺跡では多くの竪穴住居が発掘されています。竪穴住居とは地面を長方形又は円形に掘り込み、その中に数本は柱を立て、屋根を茅などで覆った家です。郷土資料館の前にある竪穴住居は約5,000年前の住居跡を復元したものです。

竪穴住居の形は、約8,000年前から約5,000年前頃は長方形のものが多かったようですが、約4,500年前になると、円形になりました。更に約4,000年前には円形のものに加え柄鏡形と呼ばれる、円形に手鏡のような張り出しを持つものも出現します。金原遺跡でも古いものは長方形、約4,000年前から3,500年前のものは円形や柄鏡形の住居が発掘されています。



竪穴住居跡復元図



長方形の竪穴住居跡（第9号住居跡） 約7,000年前頃



柄鏡形の竪穴住居跡（第7号住居跡） 約3,800年前頃

金原遺跡で発掘された炉穴と土坑

炉穴とは屋外に造られた調理場と推定されます。煮炊きを行う住居跡内の炉跡との違いは、やや深い穴を掘っており、穴の底面に焼土が多量に残っていることです。複数の穴が重複して発掘される場合もあります。約7,000年前の縄文時代早期後半までは住居内に調理場を設けることは少なく、屋外に調理場を造っていました。金原遺跡では南側の台地縁辺部や斜面部で多く発掘されています。

一方、土坑とは縄文時代の人々が地面に掘った穴のことを総称して言います。そのため、何を目的に掘ったものが殆どが分かりません。恐らく、貯蔵穴やごみ捨て穴、墓穴、お祭りに伴う穴、生活する際必要な穴などと考えられます。金原遺跡では住居跡群やその西側で多数発掘されました。



第 11 号炉穴



第 226 号土坑出土土器



第 372 号土坑



埋設土器

埋設土器とは土の中に土器を埋めたもので、中には亡くなった幼児や胎盤を収納したと推定されています。住居跡の入り口部などで発掘されることもあります。底部に穴をあけたりすることもあり、祭祀的なものと考えられています。埋甕とも呼ばれます。

金原遺跡では、住居跡の入り口部などで発掘された埋設土器が6基、単独の埋設土器が3基発掘されました。下の写真はいずれも単独の埋設土器です。



第 1 号埋設土器



第 2 号埋設土器



第 3 号埋設土器

金原遺跡から出土した石器、土製品

金原遺跡では数多くの石器や土製品が出土しています。石器としては弓矢の先に付ける石鏃、木の実を磨り潰す石皿や磨石、土を掘る打製石斧、木を切る磨製石斧、皮を剥ぐ石匙、魚とりで使うウキ、祭祀に係る石棒や石剣、石製の耳飾などが発掘されました。土製品としては、使用目的の不明な有孔球状土製品やリング状土製品、ミニチュア土器、土器の蓋、投網の先に付けられた土器片錘などが出土しています。

土器片錘

土器の破片で作ったおもりです。トアミの先に付けたおもりとして利用されていたことから、この道具が出土すると、漁撈をしていたことが分かります。



土器片錘



土器片錘を使ったトアミ



土器の蓋（ふた）
（第2・25号住居跡出土）



ミニチュア土器
（第3・7号住居跡）

リング状土製品

使用目的が不明な土製品です。一部に磨られた痕跡が残っているため、紐に通しペンダントとして利用したのでしょうか。



リング状土製品
（第7号住居跡出土）



有孔球状土製品（第21号住居跡）

有孔球状土製品

使用目的が不明な土製品です、上から下にかけて穴があげられており、表面には文様が描かれています。祭祀的なものか装飾品でしょうか。

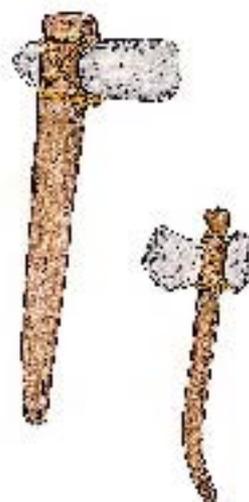
石斧

石斧には大きく分けて、石を打ち割って作った打製石斧と石を磨いて作った磨製石斧があります。一般的には打製石斧は土掘り用の道具、磨製石斧は木を切る道具といわれています。



打製石斧

打製石斧使用状況



耳飾

約7,000年前から5,000年前につくられた石製の耳飾です。牛の鼻輪のような形をしています。現在のピアスと同じようにして使われました。



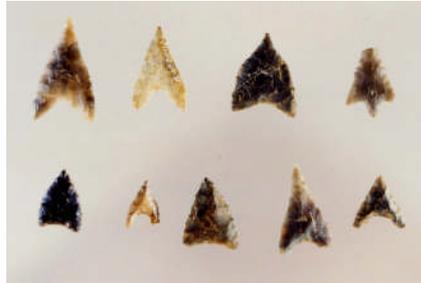
耳飾 (第6号住居跡出土)



耳飾使用状況

石鏃

弓矢の先に付ける道具です。黒曜石やチャートと呼ばれる鋭利な石を用います。この石器が出土することで狩猟をしていたことが分かります。



石棒

石棒

男性器を模したものとされています。神社の御神体となっているものもあります。子孫繁栄を願いつくられた祭祀的なものです。ちなみに女性を表したものとしては土偶があります。



石棒



ヤジリ使用状況

石皿と磨石

石皿と磨石はセットで使用します。石皿の一部には穴がけられたもの(凹石)があり、ここに木の実を入れ叩き石などで割り、その後、石皿と磨石で木の実を粉状にしました。粉状にした木の実を加工すると縄文クッキーなどが出来ます。



磨石と石皿



ベンガラが付着した磨石



石剣

祭祀に用いられたものと考えられています。線が刻まれています。

浮子(うき)(第3号住居跡出土)

石匙

匙のような形をしているため石匙と呼ばれますが、実は動物の皮を剥ぐ道具です。

金原遺跡 全測図





宮代町郷土資料館

発行 宮代町郷土資料館

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原 289 番地

TEL 0480-34-8882

FAX 0480-32-5601

<http://www.town.miyashiro.saitama.jp>